若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

11月20日（1973年）
毎月5日、20日発行
第61号
昭和48年11月17日第三種郵便物認可
購読料金 1部30円
定期購読 半年分800円 一年分1500円（〒代共）

叛旗

共産主義者同盟

発行人 川端文人
編集人 仲代真理
発行所 共産主義者同盟「叛旗」編集委員会
（〒160）東京都新宿区百人町2—16—18 小林ビル105号室 蒼氓社気付
TEL 03—362—0149
振替 東京 162856

11月21～26日 革マル早稲田祭闘争！
12月13日 早稲田解放 インフレ粉砕総決起集会
時間 午後6時・場所 代々木八幡区民会館

階級再編—生活破局をみすえ、歴史的階級像をわがものとせよ

全国の同志諸君！「叛旗」購読者諸君！今秋期闘争に我々が展望した第三の、そして最大の山場たる早稲田—インフレ闘争の最終ラウンドは目前である。我々はまず、十一・二一～二五に開催を叫んでいる官許革マル祭=早稲田祭を総力を挙げて粉砕する。十一・八川口君虐殺を象徴とする革マル全国動員による早稲田暴力支配は「何でも許せる早稲田に！」という市民社会日常におけるあたり前の主張が、闘いの合い言葉になり得る位に酸鼻を極めている。政治的には日共、協会派、毛沢東派を反スタイデ國の対手として許容、共存し、一切の新左翼に恐怖し抹殺を画り、脱政治、非政治層を基盤に革マル茶坊主サークル育成と日本全学連なる看板のみの維持に血道をあげている早大および全国いくつかの革マル系自治会の現況こそがその証明である。我々は、革マル派党派倒錯理念の犯罪性を批判し、彼らの党派闘争の論理と倫理に壊滅的打撃を与えてきたが、いま重要な一つの視角は、革マルの早大支配構造こそが彼らの韓国朴政権なみの政治水準を示しているという点である。革マル派に与えるお目玉はそれ故、早大生にとってはギリギリの強制された奴隷的忍従からの必然的抵抗運動の持続であり、我々にとっては時代錯誤的な政治思想、組織との、日本革命運動の負荷の克服を賭けた不可避な思想戦、政治戦である。戦闘の時を把み早稲田祭を粉砕せよ。忍従と強いられた無関心の日々と訣別し早大生諸君、諸君の闘いを闘い抜け。我々は早大闘争を「政治闘争の内化、社会闘争の拡充」の指標のもと血みどろで闘い抜いてきた。社会闘争の拡充とは、社会拠点、組織へ我々が介入し、情勢流動局面でより広くヘゲモニー形成を行なうなどという俗受けする指標ではない。政治集団が丸ごと社会闘争主体に二重化されることを、又エ的な日共から革マルに至る党—大衆構造として我々は批判してきた。彼らは革命集団を、実体的、行政的集団として扱っているにすぎず、結局政治・集団自体の矛盾的編成に無自覚である。政治思想における共同性と、集団表現における共同性位相を分岐しつつ構造化することこそ後退戦下の政治闘争の内化、社会闘争の拡充を可能ならしめる理念と組織のアポリアである。我々はその領域でこそ、早大闘争とインフレ闘争の共通項と差異を見出し、現下の実践根拠を示しうるのだ。学生層、知識層における時代閉塞感と、情況からの拒絶への焦立ちは、生活者における地域、職域、小共同性の流動化、家族、世代間交通の安定度喪失に逆立して拡化している。我々は早大闘争で革マル支配構造と奴隷的日常のその内実の洞察へ想いをいたしめた如く、階級解体—再編の空隙を歴史へ、階級像へつなげなければならない。以下明らかにする我々のインフレ闘争への視座は、経済闘争の徹底化でも、政治闘争への転化論でもなく、政治構想力へ不可視の階級像を操り込み、革命—歴史の獲得—創出としてある。我が道を選び激動の第三の山へ驀進せよ！

（早大闘争については二面論文を参照されたい）

情勢の泥沼的秩序化 —出口なき現況

⊖七一年夏以降、過渡期世界の本格的崩壊—成熟は、その基軸を経済過程の世界性—国民経済矛盾激成におきつつも、革命主体に異様な困惑をもたらしつつ、進行している。それは戦後経済—政治—軍事秩序の崩壊が逆に無秩序の秩序を強化している地球大空間の側からせまってくる情勢の外圧と対応である。更にいえば革命への客観主義—主観主義の両把握が今その根底から解体されつつある歴史局面であり、新たな革命—階級概念の再生が世界—国家をめぐる時間史への表出として必然化し、我々をいやがおうでもとらえてはなさぬ情勢への突入といえよう。

我々はまず過渡期世界における経済過程に照準をしぼって引き金を引くという時、マル戦—関西派風の経済危機↑政治危機の客観分析—主観主義の枠を越えて、かつ情報分析にイデオロギーのメガネを通して注釈する二種類の経済決定論者（日共—革共同）のおもわくを粉砕して、将に〈国家—市民社会の等質的成熟〉を問わねばならない。それは、国家の共同幻想水準の歴史的累積が世界空間の規定的質であり、その質に照応する社会過程の現局面における成熟度の確定の一要素として把握したからに他ならない。我々は社会的国家—経済社会構成における連関と独自性について深化すべき課題と、一方経済過程の世界的情勢の〈矛盾〉が強いている構造の推転について、双方から把握してゆきたい。

②今日、世界—日本をめぐる情勢は、世界的インフレーションの進行とそれに対応出来ぬ世界各ブルジョアジーの矛盾の露呈として報じられている。本年IMF調べで、昨年六月から一年間の卸売物価の高騰は日本一一・五％をはじめとして、オランダ八・三％、スイス八・二％ETCとインフレーションは世界的に激化している。七一年ニクソン二大声明以降、IMF体制の補修策、七一年十二月スミソニアン体制は一年余で崩壊し、今、ドルたれ流し放置下における各国変動相場制の泥沼化して先進諸国間通貨関係が延命している。米国ブルジョアジーは貿易収支補正を、まずドル切り下げによる国内産業の再強化、金税換停止によりドルたれ流しによる対外ドル債務残高九百億ドルを紙くず化することによりその独自的主導力を再編せんとしている。

この米対応策に対抗軸を形成せんとするEC（フランスを中心として）も、九月二〇ケ国蔵相会議においてもその通貨—通商、特に政治的世界戦略を提出しえず泥沼的過剰ドルの飽和化の中で無秩序をさらけ出すにすぎなかった。核戦略の米ソ領有のもとにその政治的根幹をたなあげされ、にもかかわらず、重化学工業部門における主要十四ケ国（OECD）の平準化は、その経済過程の対立—拮抗—成熟にもかかわらず、世界を包括すべき、政治的共同性水準において限定性を強いられている。

③世界的な構造的インフレーションの背景とは、我々が幾度か語って来たように、まずそのIMF（通貨）体制に因を発している。つまり第二に「ドル」の一国通貨—世界擬制通貨の矛盾が巨額な対外資本輸出、また米国際収支赤字転換により、過剰流動ドルとして世界をおおっていることである。このことはIMF・GATT九月ナイロビ会議における新固定通貨制度の再建に向けて政治妥協を計ろうとも、ユーロ—ダラー市場の世界通貨構造への有機的編成として確立された今「非現実な試み」にすぎないのである。そして、その変動相場制の放置こそ、過渡期世界における国家無策としての危機の姿である。国家の民族的共同性の拡散過程は、中国、ソ連をまき込みつつ、市民社会の私的利害の拡大膨化に照応し、経済単一国家へ生活保障—向上促進へと転移する社会経済国家の末路である。

対内政策としては不況と失業の回避が社会経済国家の至上命令であり、対外表現は構想、戦略なき均衡政治至上化へ到っている。まさにこれが重要なことであるが、インフレ構造激成過程における生活的破局の質とは、世界的課題であり、かつ、社会的論理、規範より言うなら地域—職域—家族域における民衆的共同性倫理—伝承を社会的国家が収奪し、私的表現に実存性が裸化され、生活的思想—時間の蓄積を切断されている構造こそ核心である。社会的国家の保障とは、その様な倫理—規範の民衆への共同化ではなく、経済的、物質的還元能力に規定された位相へより明確に分離されているのである。そして民衆の時間共同性の収奪過程は、自らの外在的欲求へ、その国家担保を求めていく生産力向上信仰のうらうちを保障させ、自らぬきさしならない私的消費欲望へ内的時間をスライドさせているのである。社会的国家はその位相を何らあつかえず、故にインフレ放置においても、国内需要拡大衝動を換起せしめているのだ。変動相場制の泥沼化とは、その生活的破局のより大きな促進力として先進諸国の社会的危機—不安を醸成している。

④我々はもう一つインフレ構造因による新局面を迎えている。今秋期における中東戦争の勃発であり、アラブ諸国の石油資源の輸出国指定禁止、産出削減、値上げである。

石油資源削減戦略は南後進地域の北先進国による南の世界的分業（第一次産品、北先進国投下資本による資源収奪）収奪構造に思わぬ動揺をまき起こしている。

経済基軸を変動相場制によるドル債務の一時的解消と中国のまきこみ、軍事基軸を米ソ開発構想による密通を基礎とした核独占による総合核戦略構想として、政治基軸を西独東独、北朝鮮を包括する全国家国境固定を目指す新国連体制として推進させて来た。そしてその先進国主義圏再編は、政治的安定度強化に見合った軍事戦略の縮少（NATO、SEATO、ASPAC）を開発路線への先進諸国まき込みとして、それに上回る南後進国分業再編へと構想した新大西洋憲章案の提唱である。

石油資源問題とは国家位相に限定されながらも南からの北への挑戦であり、そして一九四五年以降の世界間分業遂行以外この過渡期世界延命をはかり切れぬ経済構造への絶望的反抗であり、かつ資源国家—加工貿易国家への矛盾の集中である。重化学工業部門主導型産業高度化政策は、EC（特に西独）、日本に顕著であり、しかも最も国連平和共存—世界秩序防衛にしかその延命の道がとされている局面は、その産業構造の根底をくつがえすものである。

一方資源問題の政治化は、中東アラブ諸国の革命性の水準を問うている。政治過程からいえば、米ソ戦後後進国地域戦略としての民族国家形成の容認と社会経済矛盾の国内封殺の裡にあり、石油政治の代償がパレスチナ国家保障に帰結しようと自らの解放が極精に到るのは自明であろう。将に革命戦争の地域限定化を突破し、世界間閉塞秩序を打ち破る民衆共同性こそ問われているのである。

革命を空間的外延でしかあつかえぬ我が第三潮流派は、中東支持が国連加盟—ベトナム和平過程で頓座し、民族問題を非抑圧民族主義でしか扱えず今唯一、中東アラブ支持で延命している。さて、諸君よ！君らはまたアラブ「和平」で絶望的な涙を落すであろう。

我々は、はっきりと世界—国家関係における幻想累積水準としてアラブ・イスラエル戦争を評価せねばならない。つまり両国家の世界性を共同幻想の歴史性として把握するとき、民族国家形成をめぐる対立は、米ソ開発構想戦略の射程の中にすっぽりと包括され、もしくは政治的世界均衡政治—平和共存国連体制に国家をかけえぬのである。石油資源をめぐる政治戦略化も南北問題を基軸にした波及度としてキッシンジャー構想を一定程度反古にしようとも世界戦略へと押し切ることは出来ず、国家関係において宗教国家位相における自由国家位相へのプレッシャーで終結するのである。

しかし経済過程から見るとき、変動制による恒常的通貨不安は、金融資本形態より、先行き不安であり国家併存世界では解決しえない。資源獲保—短期的には一次産品への換物—投機に暴走させている。絶えず不安であり、減価してゆくドル通貨保有から天然資源獲保への乗りかえである。ゴム、石油小麦、米といった原材料は暴騰しローマクラブの解決なき（国家問題）宗教的末法思想の平準化とともに重化学工業主導—加工国ブルジョアジーを悲観論に、おとしこんだ。一方でマルサス人口論のあてはめ的悲観論が小インテリどもの話題をさらい、時間軸喪失、地環不安等の情報過多と結合しつつ先進国の社会不安を増幅させている。我々はこの過程を国家—民衆における生活的時間の収奪と収奪した国家位相が国家であり世界と併存する以上克服しえぬ課題であり、一方擬制的な経済過程の世界化においても同根である。ただ歴史過程を見るに資本の世界化、と他方での寡占化は冷酷に進行しており、行政的、社会的国家は官僚会管理としてしか統括しえず、社会、経済矛盾を蓄積し膨化—外化する民衆のエナジーを噴出したところからプラグマチックにとりつくろう政策しかもちあわせていないのである。我々はここにこそ革命の現実性を見てとらねばならぬ。

11月早稲田祭粉砕—12月反インフレ闘争へ総力を傾注せよ

日本—民衆の構造的、歴史的共同性位相

①次に我々は、今春投機闘争で若干明らかにした経済的もしくは社会的国家と生活—市民社会構造を整理してゆきたい。そして日本における現位相がどの様に確定しえるであろうか、我々は遅々とではあれ確実に社会闘争の現局面を明らかにしてゆく所存である。

②まず我々は日本民衆の根源的存在を歴史的に規定している幻想的共同性の水準と位相をとらえ、経済社会的国家の構造性を把握してゆこうと思う。まず我々は構想力の側でこの戦後過程を象徴すればまさに宗教位相の沈澱過程であり自由的国家の完成—成熟過程であると指摘しえるであろう。宗教的天皇制国家幻想が敗戦アメリカ自由国家幻想の「つぎ木」によって内部に包括され、民衆の旧共同性解体収奪を展開しながらほぼ六〇年安保で自由的国家は完成されたと考える。六〇年安保とは、民衆の旧共同体からの離脱であり、家族域の近代化—自由化における年代の断層過程でありかつ、関係の恣意的自由化への包摂であった。高度成長に裏打ちされてゆく、生産力思想の民衆の信仰転移、階級解体—共同性収奪過程は三池—大正等の労働者ダマシイ旧諸関係に依拠する共同体を根底から潰滅させ急激なスピードで崩壊させてゆく過程であった。一方旧共同体にあった国家—社会的共同性の密着密通は、そのブルジョアジーの階級再編=階級解体策の前にその基盤自体を粉砕され、小共同体の関係的強度を前提とした実感主義→ロマン主義としての国体化・宗教的過激化の道はとざされたのである。自由国家位相に集中して発現される民衆のプラグマチズム化とは将にその証左である。そのことはまた政治観念位相と生活位相の分離を招来し、政治過程の独自性を洞察する安保闘争—六〇年BUNDを生み落したのである。まさに国家—前衛総体の民衆にとっての相対化過程であり唯一遅れてきたレーニンを悪読み青年達がその前衛へのロマン性—唯我性・排外性を核質に意識上昇志向、序列を絶対価値化としているのである。民衆にとっては、これらは全て相対的なことと了解し切っており、自由的幻想国家にとってはもはや自らの内部に構造化した二要素にすぎないのである。

自由国家の完成過程は、政治過程にとってみても共同性の宗教的刻印からの解放であり「やるも自由、やらぬも自由」である兎—SECT6を貫く歴史的水準は、六〇年段階での最高水準である。まさに国家—市民社会の等質的成熟—分離を革命概念の内に民衆的共同性（歴史現実）をくりこみ、その位相における革命の現実性を提出していることである。ただ完成過程は革命主体—民衆にとってもその客観的性格（歴史的普遍性）を把握することを困難にする。確かにブルジョア民主主義の完成に照応していたといえよう。

③一方民衆的共同性—小共同体としての職場・地域・家族域は、解体—収奪され、その基盤自体の解体に即応しつつ関係度の自由化として、膨化して来たのである。労働選択の自由性は、職場共同性—協業的性格をくずかごになげやり、私的利害の貫徹—近代化へ吸収され、完全雇用制へと円環するのである。一方農村共同体—性を確固たる地盤とした経済外的要因として国家共同性の外にあった諸階層結合—地縁性を風化・拡散させたのである。その小共同性諸関係において最も民衆時間を対表現として保持して来た家族域の安定度の外的—内的解体過程こそ、民衆の社会的共同性の規定因としての関係度の解体と個的・共同体的契機の発現としてある。

④ここで我々が対投機—物価騰貴粉砕闘争の前進のために経済的国家構造を把握してゆかねばならない。つまり資本制社会構成体総体を有機的に構造化する道をあゆまねばならぬということである。

我々は確かに一方で日本社会構造の二重性を共同性の位相で、一方産業構造—特に労働力構造の抽出を掘出して来た。

今我々が獲得してゆかねばならぬことは、市民社会における社会的共同性と社会的経済構造の関連であり、社会経済国家との関連である。これは特に日本的二重構造を把握する視点をもたぬと先験化へ至るし、実践域の経験の内化として獲得してゆかぬ限りスコラ化する。

例えば我々は①において自由的国家の完成過程で政治的なものと社会的なものが分離したととらえた。だが60年後期における労働者の政治的革命運動への登場、学生の社会的闘争の開花はその端初的契機をかい間見せながらも持続しえなかった。この二つの画期的突出と敗北は、まさに情況を過渡期としてしか把握し切れぬ革命主体の皿と総念を歴史にしみこませたのである。我々は確かにこの国家—社会構造の多重性を科学や認識の総で先験化したいという衝動ではなく、その構造を解く鍵を獲得してゆきたいということなのだ。

叛旗前号で自由国家への完成過程で社会的国家は幻想的—行政的国家へ分化して総体として政治的国家へ預けるとした。

しかし分化とは機能化ではなく構造化しえる水準へ到達しえているということである。その意味において社会的（規範—規律）国家と社会的共同性位相を扱い一方社会的（経済的）国家と経済構造を扱い、前者の社会構造の核心を家族—対共同性相—階級成熟度の確定にしぼり、後者において労働過程、産業構造分析水準確定にしぼってゆくことが可能である。我々はこの位相より対社会国家とのプロレタリアートとしての闘いと生活的（私的な小共同体に深く刻印された）社会闘争の二重の水路を戦略的視座におし上げ総体を帝国主義的社会再編—階級解体策動に抗しえる政治的社会・経済的闘争を確定しえると考える。注意するならその二重の闘いは弁証法的に併進するのであり結合をお喋りすることではけっして把握しえないのである。ここではその二者は過渡期においては相対的独自性、つまりずれをもって再編成されてゆく歴史的革命運動の現実を見ておけばよいと考える。

日帝の構造的矛盾の激成と生活的破局の進行

①戦後相対的安定期がそしてそれを牽引した重化学工業主導型高度成長が何であり何をもたらしつつあるかを我々は今総括しえる地点に到達している。いわずもがな日本における泥沼的物価騰貴は、ブルジョア政治委員会の必死（？）の金融引き締めにもかかわらずますます、産業構成・社会過程に環流構造化し、矛盾を激成している。化学部門を原因とする公害運行、石油コンビナートを連続しておそった、生産力思想の相対化をともなった爆発、そして消費者物価の騰騰、そしてまた一方ブルジョアジーが自らまねいた産業構成の崩壊すらひきおこしかねない石油削減—まさにこれこそ出口なき構造的矛盾である。

②七三年二月十八日、変動相場制移行以降より内需拡大へ転換しインフレ放置を続けて来た日帝ブルジョア政治委員会は今、国民的課題を背負わされている。我々が幾度となく提出して来た加工—重化学主導型産業構成の基礎がゆすぶられている。前述した如く、第一次産品—原料品への世界的換物転換—価格の底値なし上昇分を国内ブルジョアジーが負わねばならず、対外輸出の高生産部門を除いた頭うちと、内需転換においても消費者物価への価格転化は日本産業構成—低賃金環元率等の破行性故ダイレクトな社会問題へ溯及する構造の前に金融政策による過剰資本の回収では政策レベルにおいても無策であることをつきつけられつつある。

③しかし、日帝にとって最もアポリアであり産業立国構想の幹根をしめていた生産資源問題こそ、彼らをして世界秩序防衛主義へ、世界市場安定化へなりふりかまわず進行させた動因である。特にエネルギー問題としての石油供給の

二面につづく

——編集局より、第三種化に伴う

開封発送のお知らせ

現下の対峙—持久戦下、及び印刷・発送諸経費の値上りに伴い、我々は、発送費の削減を計るため第三種申請をなし、今回認可されました。創刊以来、料金別納郵便—宛名印刷であっても、全て密封にて送付してきたのですが、第三種化によって三分の一の開封になります。つきましては、対権力、対社会的関係の限定で、開封が困難な購読者の諸兄姉は至急、蒼氓社までお知らせ下さい。なお従来の要請き不要扱い、密封扱いについては、変わりありません。（追記 定期購読者の皆様方へは第三種化を機に購読料の更新手続きをあわせてお願い致します。）

——「叛旗」編集局

「関西蒼氓社」を開設 —関西反帝戦線連合

西日本の同志・友人諸君へ

全国の同志、「叛旗」購読者諸君！そして日々苦闘を展開されている全ての闘う仲間たちに、漸くにして、公然と「関西蒼氓社」の開設を克ちとったことをお知らせします。

我々の関西における思想的、政治的、組織的諸実践は、その緒について以来、早や二年余にならんとしています。この間の諸実践—諸経験は、着実に我々の思想と組織へと構造化され、関西の地に累積されている政治—社会構造に対し拮抗し、伊方原発闘争をその集中環として、くさびを打ち込むに至りました。良くも悪くも60年代左翼運動の典型をなした政治過程論が政治理論としては、情勢の外側からも主体の実践の内側からも破産し解体を宣告されている現在、我々に我々自身の政治を、政治的表象としての理論や行為が社会性—経験の蓄積—の側から相対化されることを含めた我々の側での理念・形態・主体構造の創出を要請していると考えます。

我々の思想的優位性が関西型政治の負的な側面（ボス交政治と明治維新以降の政治過程論的展開）によく拮抗し勝利しえていないことを踏まえ、我々の経験の蓄積と革命構想力の構造化を軸とする真の政治力の獲得を通し、飛躍を克ちとっていきたいと考えます。

「関西蒼氓社」の開設は、そのような意味で我々の諸実践の成果を物語っているし、そこでの組織日常、闘争日常、戦闘行為は、「日常に戦闘の磁場を！」と語った語の真の意味での苦闘の持続を我々に強いています。

関西の地での今秋期闘争は、10・19—21里道橋闘争、10・21関西集会から10・24集会、10・27～29現地結集へ至る伊方原発闘争を大きな軸として過進しています。

さらに関西10・21闘争に集約されてきた成果を踏え、11月早大総結起へと進んでいます。砂川でも三里塚でもそうであったように、伊方闘争においても戦闘の時に背を向ける者は必ず実践と運動から報復されると思います。我々は関西の地における更に大胆な歩みを強固なものにしてゆきたいと考えます。

関西及び西日本の全ての同志、仲間たち！

西日本の全ゆる領域の運動上の連絡、問い合わせ、闘争、理論センターとして関西蒼氓社をフルに活用していただきたいと考えます。

右、関西蒼氓社開設のお知らせに変えさせて頂きます。

連絡先
関西蒼氓社
〇六—四五一—四八〇三

11・21～26 革マル早稲田祭爆砕へ

11・8早大闘争報告

全国の同志諸君！「叛旗」購読者諸君！そして早大四万学友諸君！早大解放闘争を闘うすべての同志諸君へ11・8闘争報告を送りたい。

川口虐殺一周忌—革マルデッチあげ早大祭を巡るドレイの杜をゆるがす十一月の闘いは、11・8この日の闘いをもって、本格的な闘いの幕は切っておとされた。

九月にはいって以降、秋期早大解放闘争の高揚にたいして、権力当局、革マル一体となった擬制的城内平和で鎮圧しきろうとする策動は勝利したように見える。

就中、十一月にはいってからの革マルの学内の戒厳令体制は、徹底的であり、（一方裏面では神大事件以降の組織的動揺も著しい）社会科学部の闘う諸君への日常的な尾行、街頭テロ、政経学部のクラ討へはいった同志へのテロ、教育学部の大衆運動への抑圧等々革マルのなりふりかまわぬ悪あがきは枚挙にいとまがない。そして、一方で一年間という時間の経験があたかも過去の所業へ川口君虐殺を疎遠にさせていく〈日常〉への回帰を逆なでするような"川口君追悼集会"を当局、権力とのボス交によって開かんとしたのである。しかし、革マルが全国動員の外人部隊を導入し、早大大衆運動の鎮圧をもくろみ、11・8追悼集会の情宣活動を鉄パイプ片手に、大衆に迎合せんとするのも、一陣の秋風と同様ただ喧騒なアジテーションとして過ぎていくのも当然なことであった。そうした中にも、大衆的な革マル、当局への糾弾の声は、いかに革マル、当局そして権力が強権的弾圧を強化しても、確実に11・8を準備し、11—12月攻勢へ向かってきているのである。

十一月八日、川口君虐殺一周年のこの日、権力、当局は、大衆的な当局、革マル糾弾の爆発を怖れ全学ロックアウト、早大周辺に首都圏の機動隊を配置し、戒厳令体制をひいた。そして、この日のもうひとつの否定的事実は、革マルと勝共連合のロンドであった。この日革マルは当局とのいつもどおりのボス交を行ない、大隈講堂前集会の許可を"合法的"に受け、文字どおり国家権力、早大当局の庇護下で"虐殺者による虐殺者のための虐殺者の"「川口君虐殺一周忌集会」を五百余名で、朝倉、成岡革マル最高幹部の音頭取りで行なった。外の革マルに対して、大隈講堂内には勝共連合が同じ集会を行なったという事実を見よ！

こうした事態から、この否定的現実から11・8闘争は、断呼として開始された。

闘いは午前10時から実質的な火ブタを切った。社会学部の闘う学友を中心とした百余名の座り込み闘争が最先端で行なわれ、機動隊との攻防を貫徹し、十一時からは千余名の早大学友と、これに呼応し、支援せんとするわれわれ、解放派の部隊の決起をもって、本格的な闘いは展開される。闘いは5・17闘争を上回る大衆的展開として、虐殺者=革マルによる一周忌集会を粉砕し、当局のロックアウト攻撃の粉砕の闘いは、昼をはさんで最高頂に達っした。この第一波闘争は、大隈通りの十字路において二時間余に渉って街頭集会、座り込み、デモ、そして街頭バリケード戦として闘い抜かれた。この闘いの大衆的高揚と拡大を恐怖した権力は、機動隊の最大動員で先進的学友を封じ込め、外堀公園に五百余名も強制的に運び去り、夕刻に至るまで外堀公園に閉じ込めるといった手段で答えてきたのである。だが、こうした権力の攻勢に対して、なおも先進的学友は闘いを続行していったのである。

この闘いの渦中に、われわれは決して許すことのできないこの日の三つめの否定的事実をみたのである。それは「挑発にのるな！」「チョーハツするな！」と、国家権力に対してではなく、最前線で闘っている部分に対して日共—民青並みに偽善者よろしく「帰れ！帰れ！」という対応に出てきた四トロの諸君のことである。彼らは第一波攻勢に続いて第二波攻勢に転じようとしていた闘う学友に対して、何の展望も指し示すことなく、"四時、箱根山公園へ"というビラをまき、攻勢の分断策動を為したのである。この時、最初の攻撃を展開した部分がまだ外堀公園に封じ込められている事実を知っていながらもである！彼らは、文学部、教育学部、政経学部自治会執行部の名前を盗称し、早大周辺での暴力的大衆闘争の発現に対して、集会—カンパニア焼香デモで集約をなさんと、権力に許されたメット着用をもって自派の集会デモに街頭闘争を展開している部分を囲い込んだのである。彼らに批判をなさんどした学友に対して彼らは、またしても「挑発者」とレッテル貼りをなしてきたのである。

彼ら四トロ諸君の低レベルのマヌーバーによる菊の献花に対して早大大衆が失笑していたことはあまりにも当然のことである。典型的な古典左翼四トロ諸君が、どのように早大闘争に意味付与しようとも、何の奥才をかけうるべくもなく、一年余の闘いに対する敵対行為であることを明らかにしておきたい。

この日の三つの否定的事実と、二つの戯画（四トロ集会と革マル集会）は、とりわけ革マルは成岡のヒステリックなあいもかわらぬ"小ブル諸派等々…"のアジテーションに空気を入れられ、われわれの闘いの突出に対して、その度に集会をやめ、旗ザオ部隊が戦闘体制を構えるという浮き足だった構図は、権力の楯を武装レポ隊が横行するという仕末であった。

われわれは、こうした11・8における一切の展開をあくまでも冷徹にみつめなければならない。この日われわれはどこで何を克ち取り、何をどのように克ち取れなかったかをである。

存在する早大大衆の広範なる自然発生性、しかし立ち遅れる主体—早大闘争を担う社会集団の未形成の中で11・8闘争は闘われ、可能な限りの闘いを展開し抜いた。

全共闘以降の社会闘争主体の範型—理念の構造的創出への苦闘は敗北と勝利の接点を持久的に闘われている。早大を巡るわれわれの側での否定的側面—早大全学十一月共闘会議を巡る諸課題、突端的闘いにはびこる反暴力主義者、四トロ代行主義者、あるいは自治会ポツダム主義者、閉鎖的アンチ・セクトセクト、負的な啓蒙主義者—を他者へのレッテル貼りや、党派闘争一般におしとどめることなく、そうしたすべてを包括しうる理念—範型の創出へ向け、一切の力を集中していかなければならない。

ドレイの日常撃破へと多くの諸問題を社みつつ、今、ゆっくりと確実に、何かが動いている。ともかく11・8の闘いを第一波としてより本格的な闘いの胎動は開始された。

われわれはあくまでも確認しておかなければならない

われわれを巡るさまざまの否定的側面は、それみたことか、という類いでの革マルの皮相な「統一と団結」の否定的反映などでは決してないことを。

われわれは自らの闘いの執着をこの一年間の闘いの中で、無数の傷つき血をながし、"関係的死"を強制されてきた"日常"の破砕へ、戦列へ加わるものも、去っていったものも、見ているだけのものも一切を包み込んで流れる"日常"の破砕へ更に深く刻み込もう

デッチ上げ革マル早大祭を全力をあげて粉砕せよ！すべてのもてる力をドレイの杜の根底からの爆砕へ攻め上ぼれ！血には血の報復を！

早大闘争の現段階と政治集団の任務

全国の同志諸君！就中学生戦線を中心として拠点、社会闘争に精魂を込めている諸君、現下の早大闘争の行末に、それがはらむ普遍的質に着目せよ。別稿に詳述した如く、11・8川口君虐殺一周年闘争は、当局の全学ロックアウト攻撃と革マル派のみへの構内追悼集会許可という悪条件のもとにも拘らず果敢に闘われた。11・8は当局に支援され、全国動員による武装を恒常的に許容されることに依ってのみ早大に登場しえている革マル派の醜悪な姿を満天下に知らしめた。だが他方で昨秋以降の一年間の早大闘争の到達水準とその壁、また政治集団と学内行動者集団各内部のそして相互間の結合とエナジーの質をも示したのである。11・22〜25革マル早大祭を目前にして、我々は現下の闘争局面を直視し新しく全力で飛躍を獲ちとらねばならない。早大祭粉砕闘争において、まず第一に明らかにせねばならぬのは今11・8へ登りつめる運動過程を点検し、権力、当局……たって最も効果的な積極的闘争方向を確定することである。第二には、早大……明にし我々の任務と限定を原理的、実践的にさし示すことである。第三には……大闘争への関わりと評価の軸を定め、政治闘争の内化―社会闘争の拡充の焦……を浮き彫りにし、全戦線における集団表現の現局面を写す鏡とすることで……大闘争と学生運動の焦眉の課題（下）を掲載することになっていましたが、……入れ、（下）論文については長期的検討素材として次号送りとなったことを……

革マル祭粉砕への運動的旋回軸

①11・8へ至る一年間の早大解放闘争は、昨秋の革マル糾弾大衆……目指した11・8へ至る秋期展開で……ある。両者の検討の内から、権力……

……合っているのか。このことは、これまで早大当局と革マル派との10年間の人的、物的腐れ縁、学生内学生対策部としての革マル派の位置、早大秩序防衛への共通利害保有故のT－K連合等として事実的……

……革命性からK－K連合粉砕を主要にまず革マルせん滅から手がけるという対応も、4トロ派のように国家を利する内ゲバ反対、新大管法の意図を早大闘争で粉砕せよとの主張も、すっぽりと当局への反……

……性を隠れみのとしてのみ形成可能な事業である。

国家と一般企業の直接的利害結合に比し、国家と大学は間接的な精神的、技術的要素の保有と再生産を媒介にした結合であり、60年……

……

拡散する情況に拮抗し 三里塚闘争の磁場へ

反帝戦線三里塚現闘本部

……

政治思想―集団編 成と革マルの誤謬

……

「党―大衆」構造 止揚への現下の環

……

過渡期―後退戦下の 早大闘争の豊富化

……

冬期一時金三割カンパを要請す

共産主義者同盟

全国の同志諸君！支持者、友人諸君！共産主義者同盟より、冬期一時金カンパの熱烈なる要請をおくりたいと思います。

わが同盟は、秋期闘争の指標を「政治闘争の内化と社会闘争の拡充」として見据え、三里塚、早大基地・自衛隊、投機闘争を実践環として闘い抜いています。

わが同盟が、現下の権力攻防のうちに明らかにしてきたことは従来の党派の自足的な運動―組織構造、思想容量の枠を越えたところで闘いが、現実的展開をみせている……

……位相の確定において、必須な党派基盤の自覚的検証の磁場として闘い抜いてきているのです。

わが同盟は、更なる闘いの拡……

……ということです。

就中、早大―投機闘争は、日本の伝統的政治思想の止揚、民衆の経験累積の構造的、歴史的……

……戦士を獄中に奪われ、現在もなお三名の戦闘的同志を権力の手中から奪還しえぬとき、われわれは全力をあげてかれらの奪還……

……充と強化に向けて、支持者、友人諸君の圧倒的な三割カンパを要請したいと思います。

七十年六月結党以来、多くの……

……をかちとらねばなりません……救援金、裁判費用、戦闘……今後の闘いにおいて……が必至であり、精力的……のカンパを……ます。

十一～十二月……投機闘争の……を、わが同盟……進せん！

わが同盟……兄姉たちとの……連帯のうちに……

〈カンパ送……

東京都新宿区百人町二ノ十六ノ十八……一〇五号「蒼……

振替・東京一六……